

アレルギー・好酸球性炎症疾患

(病態解明・バイオマーカーと新規治療の開発)



植木 重治

教授 博士(医学)

Shigeharu Ueki

大学院医学系研究科 総合診療・検査診断学講座

研究キーワード

アレルギー、好酸球、好酸球性炎症疾患、アレルギー性気管支肺アスペルギルス症、好酸球性副鼻腔炎、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症、喘息、好酸球性肺炎

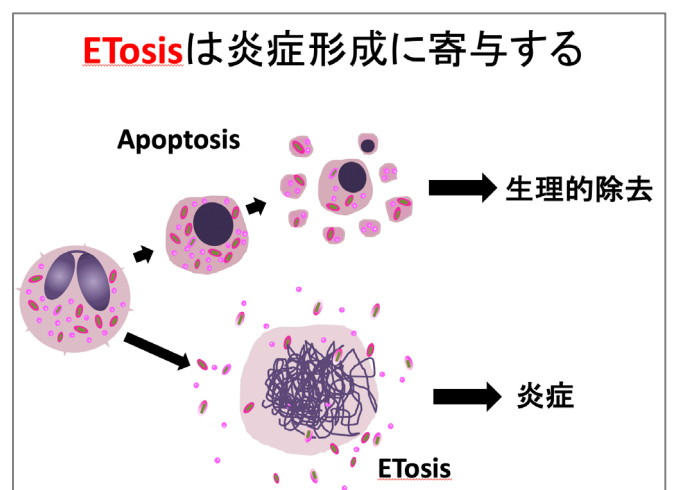
研究概要

国民の半分がなんらかのアレルギー疾患を持っているといわれています。アレルギーでは、好酸球と呼ばれる白血球の一種が悪玉細胞として働いている場合が多く、この細胞の特性に着目して研究を行っています。

アレルギー以外にも、好酸球が悪玉として働く病気はさまざまなものがありますが、そのしくみがよくわかっていないため、有効な検査法や治療法が十分でないものが少なくありません。

好酸球が炎症を起こす際に、細胞の中にある炎症物質を周囲に放出することが重要ですが、最近になって特殊な細胞死(ETosis:エトーシス)による炎症物質の放出が重要であることがわかってきました。

炎症をおこさない細胞死として「アポトーシス」がよく知られていますが、今後は炎症を起こす細胞死である「エトーシス」をモニターし、コントロールすることが新たな治療につながると考えられます。



予想される応用例

これまで知られていなかった病気のしくみがわかることで、臨床検査や治療に結びつくと考えられます。

産業界へのアピールポイント

アレルギー疾患は患者数が多く、好酸球に着目して基礎と臨床を結ぶトランスレーショナル研究が不可欠です。